

ホワイトヘッドの労働観について
—技術教育と人間形成について—
The View of Labour in Whitehead
—Technical Education and Formation of Human-beings —

濱 崎 要 子
Hamasaki Yoko

【キーワード：ホワイトヘッド、技術教育、職人労働、作務、人間形成】

本文要約

ホワイトヘッドは、思考と行動の対立を克服する教育として、技術教育を重視する。技術教育は知行合一の教育であり、人と物とが一体化した主客合一の技能を人にもたらず。この経験が、労働における労苦と喜びを統合する審美的経験となり、人に究極的満足感を享受させ、新たな自己へと人間形成する。ホワイトヘッドの労働観が、ベネディクト派修道士の労働観を出発点としていることから、禅の作務思想を対比して考える。作務は行の労働として、本来の自己を自覚するための弁道である。己事究明の弁道を通して、もともと自己に備わる仏心を自覚し人間形成する。ホワイトヘッドの教育としての労働や禅の作務においては、ともに身体観が重要な教育的役割を担っている。知行合一の関係が価値あるものの感受、或いは己事究明の成就を通して人間形成を導くのである。

英文アブストラクト

Whitehead explains that the neglect of technical education has arisen from two antitheses that between mind and body, and that between thought and action. The view of labour is the idea that the work turns into a joy by triumphing over its weariness and its pain. It takes a stand on the diligent thought of Benedictine monks. The technical education unifies mind and body, thought and action. The craftsman enjoys ultimate feelings on the process of the technical skill. The “samu” of Zen temple is compared to this view of labour. Zen monks practice the religious austerities by “samu” during every daily life, and have the spirit of self-awareness. Both the view of labour in Whitehead and “samu” have important educational parts in body.

ホワイトヘッドは、技術教育を無視したことが思考と行動の対立を生むことになったと考え(1)、相対立する二元論の思考克服に技術教育の重視を指摘する。彼の労働観は、ベネディクト派修道士の勤労思想を出発点とする(2)が、禁欲としての労働観に終始するのではなく、それは教育としての労働観である。この教育としての労働観は、技術教育を他の科学教育や文学教育と同列に扱うことであり、技術とコントラスト関係にある技能の創造力に注目することであり、職人労働がもたらす美的感受性に価値を見出すことにあった。

1 ベネディクト派修道士の勤労思想と禅の作務思想

ベネディクト派修道士の勤労思想は修道院規則の労働に基づき、禁欲としての労働であり、祈りの静に対する動の役割として、修道院生活を調和する。修道士の勤労思想は、信仰の証としての勤勉思想へと市民に受け継がれる。修道院規則の労働に比較できる労働観として、禅の清規に規定された作務がある。作務は坐禅の静的正念工夫に対する動的正念工夫として、動的正念工夫は静的正念工夫に優るとの考え方(3)から、行としての労働の役割をもつ。ホワイトヘッドは、禁欲としての労働観から「内奥の自然な本能」(4)を体得する教育としての労働観へと発展させた。他方、作務は行としての労働観から人間本来の自己を自覚する己事究明の労働観へと日常生活そのものを行道とする労働観を導く。

2 労働における労苦と喜びの関係

彼の労働観は、人が労働の労苦や怠惰を克服し喜びに転じる生き方(5)である。即ち、労苦と喜びはコントラスト関係として、労働するうちに一体化される労働観である。コーヘレス（紀元前10世紀頃）は『伝道の書』で、労働の労苦と喜びが神のみわざ故に一体なるものであると語る(6)。労苦の人生は空であるが、全ての労苦の分として楽しみが享受される。楽しみは労苦の報酬なのである。

莊子（Chuang-tzū, 紀元前4世紀後半）は、労働の労苦を人の道と考える。「彼の民は常性有り。織りて衣、耕して食う。是れを同徳と謂う。一にして党せざる、命づけて天放と曰う」(7)。民の人生は民の本性に沿ったものであり、本性に沿うことが「一」なる道であり、「天放」と称せられる人生である。又、「夫れ大塊は我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を佚するに老を以てし、我を息わするに死を以てす」(8)。「我を勞するに生を以てし」の考え方には、労苦するために身体があり、人生がある。人は老いによって楽しみがあり、死によって休息する。

ホワイトヘッドが労苦の後に労苦から転換される一瞬の喜びを考えるのに対し、コーヘレスは労働の労苦も喜びも共に神のみわざと悟り、また莊子は労苦そのものが生であり、

生に沿うことが「天放」の人生、即ち「一」なる道であり、道に沿うことを喜びとする。労働に労苦する人生は流動する過程であり、ホワイトヘッドは、労働を通して思考と行動を融合した後に経験する一瞬の喜びを、究極的満足と考えた(9)。

3 労働における流動性と恒常性

彼は究極的満足感を一つの出来事と理解する。「どの出来事も、それ自身をその場でおおいに楽しむため、流転する世界に一時停止を命じるのです。同時にそれは、過去から未来へ移り変わる形相の転化の一瞬と考えなければなりません」(10)。「流転する世界」に交わる「一時停止」の瞬間こそが、究極的満足の瞬間である。流動性と恒常性とのコントラスト関係が統合される過程で究極的満足感は、明白な事実となる。その事実の価値について、「完全な瞬間は、時間の経過のなかで不朽である」(11)。

「流動する世界」に「完全な瞬間」を表現した人に、臨濟義玄(?~867)がいる。彼は「常在家舎、不離途中」(12)、或いは「論劫在途中、不離家舎」(13)と法語で述べ、行としての日常生活と本来の自己との関係を教えた。ホワイトヘッドにおける究極的満足感は過程の目的であり、思考と行動の統合過程で新たな自己を創造する。他方、臨濟における「家舎」は己事究明の心として、弁道精神において会得された真の自己を意味する。究極的満足感は、新たな「主体—自己超越体」(14)へと人間形成することから、究極的満足感を享受できる労働は教育としての労働と考えられる。「家舎」は本来の自己を自覚することによって自己形成を図り、作務の教育的役割を成就する。

4 技術教育と知行合一

技術教育の理想は、「仕事が遊びであり、遊びが人生である」(15)。手工芸の楽しさは、「自分の仕事が自分自身の考えを表現しているとき」(16)にある。彼が、「人間の手が人間の頭脳の働きをつくったのか、それとも人間の頭脳が手の働きをつくったのか」(17)と問うとき、思考と行動の結合は、「思考と行動を越えたところに、それぞれにおいて価値あるものを把える感覚」(18)を導く。「価値あるものを把える感覚」を体得することが技術教育の目的である。「技術教育の利点は、思考を手の訓練に移し入れ、また手の運動を思考のなかへと移し入れるという私たちの内奥の自然な本能に沿うものである」(19)。即ち、技術教育は知識と労働を結合させた諸経験を導く(20)。

西谷啓治は、行を「知行合一的な行道」(21)と語る。知行合一の説は王陽明(1472-1529)が唱え、「知はこれ行の始、行はこれ知の成るなり」(22)、又、「知の真切篤實の處、即ちこれ行、行の明覺精察の處、即ちこれ知、知行の工夫もと離るべからず」(23)と説明

される。知行合一は身心一如の働きであり、主客合一の精神と同意義である。

莊子は、身心脱落の境地について、「指は物と化して、心を以って稽えず。故にその靈台は一にして桎がらず」(24)と語る。職人の手は物と一体となり主客合一の状態、靈妙な働きそのものである。かつ手の働きと心(頭)の思考は分離することなく知行合一へと導かれた技能を産み出し、一切のものからの束縛を離れた境地を人に導く。

柳宗悦(1889-1961)は、職人労働の手と心の関係を、「手はただ動くのではなく、いつも奥に心が控えていて、これがものを創らせたり、働きに悦びを与えたり、また道徳を守らせたりするのであります。そうしてこれこそは品物に美しい性質を与える原因であると思われます」(25)と述べる。

ホワイトヘッドは、技術教育を重視しながら、自己創造のために自己を動かすものについて、「あらゆる成長の源泉は君たち自身のなかにある」(26)と述べ、刺激となる究極的満足感をいかに享受するかを問題とする。真の刺激は、統合された理論の発見や理論をはるかに越える密接な諸関係を発見することから生れる(27)。全身心で感受された刺激が、新たな自己創造の起動力となっていくためには、知行合一の経験過程で、身体が重要な教育的役割を担うことになる。

5 身体の教育的役割

彼の身体観は、「最も原始的知覚は『身体を機能しつつあるものとして感じる』ことである。・(略)・『私自身で有る』という私の過程は、私が世界を所有することにもとづく私の生起である」(28)と述べ、身体の実在感から出発する。

臨済は、我の身体を「夢幻伴子」(29)と称し、「無形無相、無根無本、無住處、活地」(30)の身体観を説く。永平道元(1200-1253)は、「今我身体内外所有、以何為本乎」(31)と身体への執着を否定する。身体は空にすぎず、自己の身体は我の意思によるのではなく、空より生じ空に滅する考え方である。道元は、労働に労苦する身体から己事究明の真理を説明する。「山僧云、如何不使行者・人工。座云、他不是吾」(32)。弁道における身体的表現に対して、鈴木大拙(1870-1966)は、「超個の姿では自らを表現すべきやうもないので、必ず個一の上に具体化して出る」(33)と述べる。己事究明の弁道が身体を駆使することにあることを強調して、『碧巖録』は、「雲門示衆云。乾坤之内、宇宙之間、中有一宝。秘在形山」(34)と語る。作務は己事究明としての身体観なのである。

ホワイトヘッドは、「われわれの身体は、大部分、ある中心的な現実的契機が、それに先立つ諸部分の基礎的経験を継承することができる仕掛けである」(35)とし、「諸感じを総合

し強化する道具としての身体」(36)を考える。「道具としての身体」について、西田幾多郎は、「人間は身体的存在たると共に、人間の身体は道具でなければならない」(37)と説明する。西田は、身体を道具化して物を作る存在者が、「物を動かすには、自己が先づ物でなければならない、我々は身体を有たなければならない。・(略)・我々は歴史的世界から生れるということの意味する」(38)。我々が身体をもつが故に、世界の継承者になりうる。

ホワイトヘッドにとって、「道具としての身体」は、因果的効果の影響を受け易い諸感じを生み出し諸感じを究極的満足感へと統合する身体観であるが、西田にとって、「道具としての身体」は「作るものが作られるものである」(39)世界を实践する主体であり、「作られて作るものの極限に於て、我々は絶対に超越的なものに面すると言うことができる。そこに我々の自覚があり、自由がある」(40)という本来の自己を自覚する身体観である。

6 職人労働における審美的経験

身体を道具化することは、物に自己を表現し、物を道具として自己を技術する存在者とする。「行為的直観によって、個性的に構成すると言うことが技術ということである」(41)。技術によってもたらされる審美的経験は、技能の創造力による。

ホワイトヘッドは審美的経験について、第一は、「感情の主観的一体性」(42)として、「個人性の主観的感覚」(43)の「個人化された宇宙」(44)である。第二は、「相互的適切性の客観的一体性」(45)として、「主観的感情の源泉と同一視される審美的対象」(46)である。つまり、主体的統一である知行合一及び自己と対象との主客合一とがともに経験されねばならない。彼によれば、「多のうちの一であるという、また多の構造から生起する一であるという自己享受」(47)が、「多が一つの経験、つまり満足となる」(48)。多即一の経験が、人に満足感を享受させ、審美的経験を人にもたらす(49)。

審美的経験を導く知行合一及び主客合一にこそ個人性の美的価値観がある。職人労働は美的価値において機械大量生産に対抗する。彼が説く職人芸は、「個性的意匠や個性的手順の展開」(50)である。彼は、人間の労働を機械に置き換えても、なお残る技能の美的価値を忘れなかった。それ故、彼は、大工業機械生産制が没個性な生産品を大量販売する社会に対して、「大量生産と職人芸の連繫」(51)を提案する。「機械化時代と活発な職人芸との融合」(52)は、「私たちの複雑な人間性のただ一面のみに目先を向ける近代商業政策の甘い単純さをたぶんにぶち壊すことになる」(53)。

7 技術と技能について

機械技術は知識の訓練から何人にも適応できる技術であるが、技能はその人の個人性に

支配され、その人の精神性を表現する。「必要な技術的卓越性は、技能を支配すべき精神力を損傷し勝ちな訓練によってのみ獲得される」(54)。技術と技能との関係はコントラスト関係として理解され、このコントラスト関係は教育の問題でもある(55)。「真の技能は、意識的練習の域から抜け出て、無意識的な習性」(56)を求める。職人労働が仕事の修業過程と、職人の養成過程を同一軌道とするのは、技能の教育作用にある。

ホワイトヘッドによる教育としての労働では、「統合された経験を成就するための自己構成の過程は一つの新しい産物を産み出す」(57)のであり、自己創造の過程とは、「創造的観念が決定的な個性の限定と達成に向かっていく段階である。過程は最終目的の成長ならびに成就である」(58)。一方、作務思想から導かれた行としての労働は、もともと本来自己に備わっている本性を自覚することにある。作務は本来の自己を自覚するための自己教育であり、日常生活を行道とする。ホワイトヘッドの労働観が新たな自己創造の労働観と考えられるのに対し、作務思想は本来の自己を自覚する労働観と表現することができる。

(注)

(1)A. N. Whitehead : *The Aims of Education and other Essays* ,The Free Press, New York , 1967 , pp.50 (森口兼二・橋口正夫訳『教育の目的』『ホワイトヘッド著作集』第9巻、松籟社、1986、75頁)

(2)ibid.pp.44 (同訳書、66頁) Max Weber (1864-1920) は『プロテスタンティズムと倫理資本主義の精神』(大塚久雄訳、榊岩波書店、1989) で、信仰の証として勤勉に労働することが資本主義発展の<Ethos>の役割を担ったと考える。

(3)平田高士「作務・托鉢」講座『禅』第2巻、筑摩書房、1967、179頁

(4)op. cit : *The Aims of Education and other Essays* , pp.51(前掲訳書『教育の目的』77頁)

(5)ibid.pp.44 (同訳書、66頁)

労働における労苦や怠惰と喜びの関係は、『カンタベリー物語』において、英国人のユーモアに並列した教区司祭の話として語られる。Geoffrey Chaucer : *The Complete of Canterbury Tales* , Arcturus Publishing Limited , London , 2007, P.363~364

(6)R・キッテル校注ヘブライ原典 : *B i b l i a H e b r a i c a* (中沢洽樹訳『旧約聖書』『伝道の書』前田護郎責任編集『聖書』世界の名著13、中央公論社、1978、281頁,283-284頁,290-293頁 William Morris (1834-1896) は、労働の幸福感が作品に人間的な喜びのしるしを刻印すると考える。William Morris : *Art and the Beauty of the Earth* , 1881 (内藤史朗訳『民衆のための芸術教育』明治図書出版(株)、1971、74頁)

- (7) 莊子：『莊子』、続古逸叢書（森三樹三郎訳『莊子』小川環樹責任編集『老子莊子』世界の名著4、中央公論社、1992 第5刷、299-301 頁） (8) ibid.（同訳書、268-269 頁）
- (9) A. N. Whitehead : *Essays in Science and Philosophy* , Greenwood Press Publishers , New York , 1968 , pp.172（蜂谷昭雄・井上健・村形明子訳『科学・哲学論集』上巻、『ホワイトヘッド著作集』第14巻、松籟社、1987、206 頁） (10) ibid. pp.204（同訳書、247 頁）
- (11) A. N. Whitehead : *Process and Reality* , The Free Press , New York , 1985 pp.338（山本誠作訳『過程と実在』下巻『ホワイトヘッド著作集』第11巻松籟社 1985、603 頁）
- (12) Ruth Fuller Sasaki : *The Recorded Sayings of Ch’an Master Lin – chi Hui - chao of Chen Prefecture* , The Institute for Zen Studies , Kyoto , 1975 , pp.5（入矢義高訳『臨済録』(株)岩波書店、1989、10～11 頁）
- (13) ibid. pp.64（同訳書、27 頁）
- (14) op. cit. : *Process and Reality* , pp.28（前掲訳書、上巻、46 頁）
- (15) op. cit. : *The Aims of Education and other Essays* , pp.43～44（前掲訳書、65 頁）
- (16) op. cit. : *Essays in Science and Philosophy* , pp.172（前掲訳書上巻 206 頁）
- (17) op. cit. : *The Aims of Education and other Essays* , pp.50（前掲訳書 76 頁）
- (18) op. cit. : *Essays in Science and Philosophy* , pp.172（前掲訳書上巻 206 頁）
- (19) op. cit. : *The Aims of Education and other Essays* , pp.51（前掲訳書 77 頁）
- William Morris は、「心的な諸能力の一般的開発と、眼と手の諸能力の一般的開発とは、われわれが装飾芸術を得る直接的な手段となる」。William Morris : *The Lesser Arts , or The Decorative Arts* , 1877（内藤史朗訳『民衆のための芸術教育』30 頁）
- (20) ibid. : *The Aims of Education and other Essays* , pp.54（前掲訳書、81 頁）
- (21) 西谷啓治「行といふこと」『西谷啓治著作集』第20巻(株)創文社 1990、58 頁
- (22) 『傳習録』上巻、語録（諸橋轍次『大漢和辞典縮写版』第8巻、(株)大修館書店、1971 第3刷、280-281 頁）
- (23) 同書『傳習録』中巻、語録、顧東橋に答える書（同書『大漢和辞典縮写版』第8巻 280-281）
- (24) op. cit. : 『莊子』、続古逸叢書（前掲訳書『莊子』 424 頁）
- (25) 柳宗悦『手仕事の日本』(株)岩波書店、1985、14 頁
- Bernard Leach (1887-1979) は、柳宗悦が3人の仏教代表者（法然、親鸞、一遍上人）の宗教思想に彼の審美眼を見出したという浜田庄司の言葉を取り上げる。Bernard Leach : *Beyond East and West* , Faber and Faber Limited , London & Basingstoke , 1978 , pp.300

- (26)op. cit. : *Essays in Science and Philosophy* , pp.171 (前掲訳書、上巻、204-205 頁)
- (27)ibid. pp.219 (同訳書、265 頁)
- (28)op. cit. : *Process and Reality* , pp.81 (前掲訳書、上巻、140 頁)
- (29)(30)op. cit. : *The Recorded Sayings of Ch’an Master Lin – chi Hui - chao of Chen Prefecture* , pp. 15 (前掲訳書、61 頁)
- (31)永平道元「学道用心集」大久保道舟編『道元禅師全集』下巻、筑摩書房 1970、254 頁
- (32)永平道元「典座教訓」同編書『道元禅師全集』下巻、298 頁
- (33)鈴木大拙「臨済の基本思想」『鈴木大拙全集』第 3 卷(株)岩波書店 1968、388 頁
- (34)朝比奈宗源訳註『碧巖録』(中)、(株)岩波書店、1968 (14 刷)、252 頁
- (35)op. cit. : *Process and Reality* , pp.178-179 (前掲訳書、上巻、311 頁)
- (36)ibid. pp.180 (同訳書、上巻、313 頁)
- (37)西田幾多郎「哲学論文集第一」『西田幾多郎全集』第 8 卷(株)岩波書店、1965、169-160 頁
- (38)西田幾多郎「哲学論文集第二」『西田幾多郎全集』第 8 卷(株)岩波書店 1965、398 頁
- William Morris は、職人労働について、「かれ自身の考えだけではなく、過去の人たちの考えがかれの手を導くのである。そして、かれは人類の一部として、創造するのである。」William Morris : *Useful work versus Useless Toil* , 1884 (内藤史朗訳『民衆のための芸術教育』91-92 頁)
- (39)同書、401 頁
- (40)西田幾多郎「哲学論文集第三」『西田幾多郎全集』第 9 卷、(株)岩波書店、1965、50 頁
- (41)同書「哲学論文集第三」567 頁
- (42)op. cit. : *Essays in Science and Philosophy* , pp.130 (前掲訳書上巻 157 頁)
- (43)(44)ibid. pp.130 (同訳書、上巻、156 頁) (45)ibid. pp.130 (同訳書、上巻、157 頁)
- (46)ibid. pp.130 (同訳書、上巻、156 頁)
- (47)op. cit. : *Process and Reality* , pp.145 (前掲訳書、上巻、251 頁)
- (48)ibid. pp.154-155 (同訳書、上巻、268 頁)
- (49)op. cit. : *Essays in Science and Philosophy* , pp.129 (前掲訳書上巻 156 頁)
- (50)(51)ibid. pp.162 (同訳書、上巻、195 頁) (52)ibid. pp.164-165 (同訳書、上巻、197 頁)
- (53)ibid. pp.165 (同訳書、上巻、198 頁)
- (54)op. cit. : *The Aims of Education and other Essays* , pp.96(前掲訳書 136 頁)
- (55)(56)op. cit. : *Process and Reality* , pp.338 (前掲訳書、下巻、604 頁)
- (57)ibid. pp.179 (同訳書、上巻、311 頁) (58)ibid. pp.150 (同訳書、上巻、260 頁)